

岡垣射爆撃場の歴史①

岡垣歴史文化研究会 入江東樹

昨年(2018)6月7日、三里松原内にあった岡垣射爆撃場が撤去されてから40年を迎えた。

この節目の年に、岡垣歴史文化研究会では、昨年9月に「岡垣射爆撃場撤去から40年 三里松原の歴史と現状や課題」と題し、研修会を行った。内容は、

- ① 藩政時代の松原の植林話者 入江東樹
- ② 岡垣射爆撃場の歴史話者 田和昭壽氏(岡垣歴史文化研究会会長)
- ③ 松原の現状と今後の課題話者 平井政秀氏(三里松原防風保安林保全協議会長、松保護士)

の3つをテーマとした。その後は町民文化祭(11月2日、4日)でも同様のテーマで資料展示を行った。①②③のことについて文章で紹介したいが、「藩政時代の松原の植林」は広報おかがき1月号・2月号の新岡垣風土記のコーナー

にて、羽山健一氏が紹介しているため省略する。

以上のことから「岡垣射爆撃場の歴史」と「松原の現状と今後の課題」の2つのみを紹介する。

なお、「岡垣射爆撃場の歴史」は、三里松原内(芦屋側)に陸軍の芦屋飛行場ができたころから触れていきたい。

【陸軍芦屋飛行場の建設】

1931(昭和6)年の満州事変から日中戦争へと軍国主義が進む中、1939(昭和14)年、三里松原内(芦屋側)に陸軍の飛行場が建設されることとなった。

三里松原は、藩政時代から農作物や田畑を守るために植林されてきた。1897(明治30)年に三里松原は国有林となっていたが、松原が飛行場建設のために国策として伐採されることには協力せざるを得なかった。

1939年から翌年にかけて、

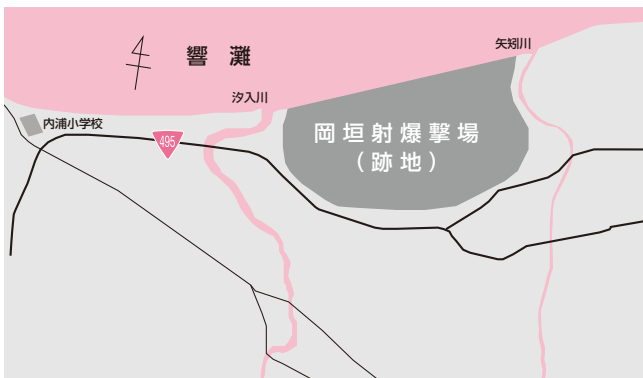
松の伐採が大鋸で行われた。伐採後の整地は困難を極め、岡垣も含めて多くの勤労奉仕隊が出動した。整地用の土は芦屋や岡垣、遠賀から運び入れ、これらの工事は福岡県が担当した。

1942(昭和17)年5月、芦屋飛行場が竣工した。すでに、アジア・太平洋戦争は始まっていた。

同年12月、芦屋飛行場第14部隊が配属された。1945(昭和20)年、日本軍は本土決戦を想定して、本土を2つの地区に分け、中部地方以東に第1総軍(司令部は東京)、近畿地方以西に第2総軍(司令部は広島)を置いた。

この第2総軍のもとで、九州の陸上部隊は福岡市に司令部を置いた。そして「郷土の守備隊」として、九州各地に軍団が配属された。九州は第16方面軍として、第40軍と第56軍、第57軍の3つの軍が編成された。第56軍が司令部を飯塚

に置き、3個師団をもって北部九州の防衛を担当した。岡垣地域の防衛は、芦屋に司令部がある師団があたった。



▲岡垣射爆撃場周辺図